
SUCCESSION of WITCHES LOVE ? ~ **迷えしフクロウ** ~

中之讓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S U C C E S S I O N o f W I T C H E S L O V E ?
　　＼迷えしフクロウ＼

【Nコード】

N 3 9 8 3 Y

【作者名】

中之譲

【あらすじ】

晴れてSeedになれた3人に初めての任務が舞い込んだ！

統治された大国の小さな領で羽ばたくレジスタンス、渦巻く大国の陰謀と不思議な夢・・・

果して彼らの運命は？

かけだしの若き傭兵の物語が幕を開ける、シリーズ第2弾！

旅立ち（前書き）

ついにパート？へ移行です。く終わりの始まりくを読んで下さった方もそうでない方もよろしくお願いします！

旅立ち

朝霧が日によって急速に掃除されたあとのバラム島は、少しばかり肌寒かった。モンスター達は既にその牙を光らせ、夜行性の者は既に深い眠りに落ちている。しかしアホウドリ達がいつものように見下ろすバラムガーデンでは、Seed就任パーティーから2回目の朝を迎え、モチベーションと活気を失う生徒達で溢れていた。

中だるみ。よくいわれる中学年がなんの目的もないためにだらだらすることを例えられる。確かに一部の者はイベントを乗り越えられず、彼らが数カ月後という次回のために頑張ろうなどと直ぐに開き直すことはできない。それは仕方のないことである。だがしかし、それよりも多くの一般生徒たちまで落ち込ませた事件がある。キステイス先生の事実上の免職である。

彼女は、覆面が大半を占める教師陣の中で唯一と言ってもいいほどに融通が利く対応ができ、生徒に親身であり、尚且つその美しい立ち振る舞いで魅了してきたガーデンに咲く花であった。その姿がもう見れないというのだ、彼女が担当する科目の成績はぐっと落ち込んでしまっただろう。少なくとも授業に対する意欲や関心は失われてしまうに違いない。

閉塞、確約されたガーデン生活の中において、生徒達にとって彼女が教師でなくなることは非常にづらい出来事であったのだ。確かに生徒達も休日には外出を許されており、大概は近くの町へと遊びに行くことも可能なのだが、なんとも無味無臭な田舎町は若者の性に合わないというものである。カードゲームなる世界的娯楽も存在しているものの、失望感はそれを上回る。

そんな中、誰もが憧れ、みなが彼女のようになりたいと、常に目標にしてきた人物の存在が遠くなるということは、花のない芝生のようなものである。彼らはそう感じていた。しかし、キステイス先生の最後の言葉だけが彼らのホープであった。

『私に会いたくないならね、Seedになつてきなさい!』
彼女の目に浮かんでいた涙は、生徒たちへの愛情の表れだった。
また、自らの生徒におかれる立場をよく理解し、それをすべて受け止めた上でのこの言葉は、厳しいようではあるがベストな表現ではあったであろう。きつと、今までいじょうに鍛錬に励む者たちの姿がいずれ戻つて来るはずだ。

最後の最後まで愚痴をこぼす3人組を食堂のおばちゃんが追い出したところ、そんな憂鬱な彼らの心を躍らせるものがあつた。なんと若きSeedが早くも任務に就くというのだ。そのうちの一人が9時という始業直前に、本来ならば教室へと急ぐはずの大眾の感情を鼓舞している。半袖短パンのその少年は浮くボードのようなものを見事に乗りこなし、みんなの目に入るように中央ロビーを旋回していた。その電氣的な音と乗り手の上手さに2階の教室前にいる者は身を乗り出して喚き、ガッツポーズをしながら興奮し、興味のないふりをしていた者や試験に落選した者も今では自分の想いを重ねて彼を励ましている。

生徒達のコールがピークに達するのを確認すると、横顔に刺青があるその少年は大きく手を振りまきながらボードを唸らせて消えていった。

対してこちらでは・・・

アナログな唸りが地を揺らすように響いている。正面玄関前の広場では特別にガーデン車が横付けされ、吹き出す排気が植木を曇らせる。どうやら曇っているのはそれと疲れ気味のスコールの顔だけではないらしい。覆面教師は片足でリズムを刻みながら時計を気にしている。

「・・・あと10秒」

鮮やかな空色のボードと海色の短パンは風を切ってカードリーダーを飛び越えた。

「9」

事務のおじさんの制止も振り切り、そのただ弱弱しい声だけが響いた。

「8 / 7 / 6・・・」

次第に電気モーター音が大きくなってくる。しかしそれに負けじと覆面教師のカウントも大きく、加えて感覚が短くなった。

「4」

「2」

「1！」

「間に合ったぜ！！」

黄色のワンピースに身を包んだセルフイが楽しそうに歓声を上げると、ゼル・デインはドリフトでその勢いを止め、ボードを跳ね上げ晴れやかに到着した。

「ガーデン内ではT - ボード禁止。忘れてはいまい・・・」

にこやかなゼルに対し、覆面教師はさめざめとしていた。ゼルが主張する、任務にも役立つという弁明は見事に否定され、T - ボードは没収された。黄色の覆面がいつにも増して不気味である。

「役に立つかどうかは我々が決める・・・」

「君たちはSeedだが・・・同時にガーデンの生徒であることには違いない。いや、Seedだからこそ一般生徒の手本となるようにガーデンの規則を遵守しなくてはならない」

覆面教師はその威厳を見せながらゼルに踵を返すと、今までその様子を見守ってきた学園長と入れ替わった。

スコール・セルフィ・ゼルの三人は就任2日目にして初任務を任される。常に任務の許可を下す学園長は、そんな初々しい生徒達に初めての任務を与えるためにここにいた。

シドはまるで仏像のように”そこ”にいた。自分の役目が来て前に出たシドは、今日の天気を憂うかのような口調で話しを始めた。

「さて、初任務ですねえ」

朝だからなのか、それとも緊張しているのか、学園長の表情は硬かった。

「君たちはこれから”ティンバー”へ行ってもらいます。そこである組織のサポートをすることが君たちの任務です。ティンバーの駅で組織のメンバーが君たちに接触する手はずになっています。」

「そのメンバーは君たちにこう話しかけてくるでしょう。『ティンバーの森も変わりましたね』と。その時君たちはこう答えるのです。『まだフクロウもいますよ』と。」

「つまり合言葉です。そして彼らと合流したのち、組織の指示に従いなさい」

適度な間を取りながらも一度に話し続けたシドは、ここで質問を許すかのように3人を見渡した。スコールは全て機械的に受け取り、セルフィも靴の裏を気にしたりと特に何も無いようだ。だがしかし、ゼルは口を開いた。

「あの・・・オレたち3人だけ、ですか？」

彼は周囲をキョロキョロと見渡した後シドへと向きなおした。シドはそれを聞くと優しくそうに微笑んだが、答えたのは覆面のほうだった。

「そうだ。この依頼は極めて低料金で引き受けている。本来なら相手にしないような依頼だが・・・」

「まあその話はいいでしよう、先生。」

シドは頭を掻きながら覆面の話を遮ると、スコールに歩み寄った。
「さて、スコール。君が班長です。状況に応じて的確な判断を下すように。ゼル、セルフィ、君たちはスコールをサポートし、組織の計画を成功に導くようにがんばりなさい。」

3人は返事代わりに敬礼をすると、車に乗り込んだ。鍵を渡されたことから成り行きでスコールは運転することになったが、2人の運転に一喜一憂するよりは自ら運転するという手間を取った方がまだいいというものだ。スコールはガンブレードを助手席に置いてセルフィが乗って来るのを阻止し、エンジンをかけた。

「あ、大事なことを言い忘れていました。バラム港の一つ手前にアルクラド村という農村がありましたよね？そこからは歩いて行きなさい。みな親睦のためです・・・」

シドが懸命に背伸びをすると、赤いセーターが少し伸びる。

「了解・・・」

スコールはエンジンを強く蒸かして最後の一言に小さな抵抗を示すと、ガーデン車はゲートの階段を荒々しくかけ下ってバラム・ガーデンを後にした。

「学園長、せめてあの3人には時間を与えた方が良かったのでは・・・？」

去っていくガーデン車を見送りながら、覆面は訊ねた。

「確かにスコールは優秀ですが、チームワークがいまいちなのではないでしょうか？」

「さすがですね、ウエンブリン。あなたでなければスコールを気にする人はいないでしょう。なにせあなたは和の大切さを一番良く知っていますからね。多くの先生方は、まるで仮面をかぶったかのように物事の奥を見れないものです」

「普通の先生方は寧ろ他の2人を憂^{むし}う事でしょうに・・・」

学園長がしっかりと答えてくれたことに、ウエンブリンはいいややと今までとは人が変わったように微笑んだ。覆面の下にそれは隠れているが、彼もまた温厚な人物のようだ。

「しかしウエンブリン、私は彼らを信じているのですよ・・・」

「信じている？」

「ええ。あなたが私を信じていてくれるようにね、ダナー君」

ガーデン車のエンジン音が聞こえなくなると、2人はバラム・ガーデンを見上げた。

「今まで、そしてこれから。世界へと巣立っていくどれだけの生徒が・・・。一番大切なことに気付くのでしょうかねえ」

S e e Dの実感

ブロロロロ…

文句のつけようがないほどの春道を、ガーデン車は走り続けていた。青々と色づいた緑の絨毯にはところどころ花々がグラデーションを添え、美しく映えている。不規則に濃淡の表情を変えるそれは、風の流れを彩りで教えてくれた。

そんな晴れやかな景色とは相変わって、車内は実に冷めざめとしていた。

彼らが憧れ続けてきたS e e D、すぐさま舞い込んだ初めての任務。実感など沸く隙ひまなどなかったであろう。それにしてもこの雰囲気はあまりにも異様だった。

南に広がる広大な海。普段であれば青く穏やかな表情を見せるそれも、彼らにはモノクロに思えるのではないだろうか。何故なら走り出して30分、車内は服役人とそれを輸送する看守のように指先一つの動きさえなかったのだから。

その要因は、間違いなくドライバーにある。たいがいの者ならば開放された窓から心地よい風を感じ、ラジオから流れる”今週のヒットナンバー”に合わせて鼻歌を口ずさみ楽しむだろうが、スコール・レオンハートはそのような風情とは無縁な男であったのだ。

まばらにそつぽを向いた黒髪に、襟元にファーがついた黒いジャケットをはだけ、同じく黒いパンツに革のクロスベルトという負の出で立ちが象徴するように、彼は愛想というものがない。

逆に人を寄せつけないオーラさえ漂わせている。これは個人として

は構わないだろうが、初めての任務遂行にあたる班の長としては非常に問題ではあった。彼はただただハンドルを握りしめ、フロントガラスに映りこむひねくれた顔とにらめっこをしているだけで、無駄な要素は一切なかった。

そんなスコールに、後部座席に腰を据えるゼルとセルフィは戦々恐々である。下手にバックミラーを覗くわけにもいかないし、かといってじっとしているのも窮屈なのだ。実地試験にて成り行きで組んだとはいえ改まって挨拶することもなかったので、これからこのメンバーで先の見えない任務に取り組むことへの見えない壁をどうにかしたかった。

ゼルはというと、その居心地の悪さを解消しようと持ってきた本をバックパックから取り出したが、開いたり閉じたりを繰り返して、セルフィも外の景色を眺めるのに飽きたためか足をブラブラさせて遊んでいる。

「ねえねえ、スコール。ラジオつけないの？」

沈黙を最初に破ったのはセルフィだった。彼女は乗りものが大好きで、景色を見られるだけでも十分だったのだが、もっと”うきうきはっぴー”なドライブが好みなのだ。それに、この時間帯は「今日のランチまみむめも」が放送されている。どうせラジオを聴ける環境ならば、是非とも聞きたいものである。

「ねえねえ、”もみむめも”聴こうよ、きつと気に入るからさ」

「……」

敢えて少し明るめに運転席を覗き込むセルフィに、ゼルもこの空気を打開するチャンスとばかりに加担した。

「おうおう、明るく行こうぜ！スコール」

「……」

「初任務だぜ、スコール。まさかなあ、Seedになれるなんて

よお。特に実地試験なんて大変だったもんなあ、セルフィ？」

「うんうん、そうだよお。B班探すのにいっぱい」くつつき虫”つけたんだからね。しかしうちらもSeedかあ」

”Seed”

戦争が過去になった現在、子供たちは実戦とは程遠い環境にいる。そんな中、若くして高い知識と身体能力を身につけ、魔法を扱うことを学べるガーデンは彼らの憧れであった。その戦闘能力のスペシヤリストであるSeedはなおさらである。自分もここで学べばヒーローになれる、そしてそれを誰もが学べるガーデン。ゼルやセルフィもそういうことを夢見てガーデンに入学したのである。それは他の生徒にも共通することであり、その中で他の人を押しのけSeedになれたとあれば、喜びは一塩であろう。

しかし、スクールにとっては違う。彼のように家族がいない者にとっては単なる飯の種だ。Seedになれば早い時期から定期的に給料が貰える。それに、卒業後もなにかと有利に働くかもしれない。その点、彼はうわのそらの二人との認識に違いがあり、この空気の差を生んでいるのだろう。

「こら、よせっ！」

「いいでしょはんちよ〜！」

しばらくスクールが無視を続けることの冷戦によって車内の秩序は一定だったが、やがて強行姿勢に出たセルフィとステレオのスイッチの覇権を争ったのち、武力攻勢の軍配は彼女に挙がった。

『みなさんこんにちは、トラビアからお送りする今日のブランチ
まみむめも　のお時間が・・・』

「てへへ・・・まみむめも」

プツツというノイズがあった後に車内にもっともらしい陽気なD
Jの声が響き渡ると、セルフィは窓枠にあごを乗せながらBGMを
鼻で奏で始めた。どうやら彼女は落ち着いたようだ。しかし、常に
サイドミラーへ睨みを利かせている。それを経てスコールは、別に
ラジオを切る方が面倒くさいとばかりにミラー越しのメッセージを
受け取った。

- しかし、新Seedだけで任務を受けるとは、学園長は何を考
えているのだろうか。

- 確かに、実地試験で組んだ3人を揃える辺りはさすがだが・・・

。

- まあ任務とはいえ戦場に行くわけではあるまいし、妥当なのか？

- いや、そんな単純じゃないぞ・・・

スコールがそんなようにいつものように思慮に耽^{ふけ}ていると、重大な
ことに気がついた。派遣先がティンバーであるとうことである。な
んだかんだで車を走らせてはいたが、よくよく目的地について考え
てみると、それなりにこの任務が厳しいものであると気がついた。
ガルバディア領ティンバーは、ドール公国の南方に位置するフォレ
スト地方にある街である。要は、とにかく遠いのである。ただそれ
だけのことはあるが、今までバラム島を離れたことはないスコー
ルたちにとっては、連絡手段もなく遠方に孤立するということはと
てつもなく神経を使うことなのであった。

- それに、ティンバーがどんな場所だか分からないしな・・・。

『はいはい、今日のラッキカラーはマリンブルーです』

「およつ？」

ゼルとセルフイがラジオの占いに盛り上がった頃、チラ、ホラと畑が姿を見せてきた。やっとアルクラド村に到着したのだ。緩やかな丘に段々畑が連なる光景はほのぼのとしている。しかしその背後に雪をかぶったグアルグ山脈が拝める光景は、荘厳だった。ハワイのような海に振り返ればアルプスがあるここには、果して観光客はどのくらい集まるのだろうか。

スコールはバス亭のような掘立小屋の前に見慣れた人影を見つけると、左足を緩めた。

「おいスコール、公共駐車場は村の奥だぜ？どうした？」

ゼルが運転席の様子を覗くと、フロントガラスの奥ではSeed服に身を包んだキステイスが両手を広げていた。

任務のための任務

「どうもどうも、みなさん仲良くやつてる？」

油が無い機械のようにギクシャクとしていた3人を待ち受けていたキステイス、そしてシユウの格好は、農村においてよく目立っていた。一つ一つが大きい畑にちらほら”ステテコと麦わら帽子”が伺える中、きちつと暑苦しそうな制服を着こなした2人は珍しい存在である。

「先生、先生、なんでこんなところにいるんだよあ？」

面識のある人が旅路にしてくれたことが心強かったのか、すかさず車を飛び降りたゼルが駆け寄る。

2人はいつも腰に手を当てていないと落ち着かないようで、最終的にはKXポーズを取ると笑顔になった。

「まあ、ここじゃなんだからあそこで話しましょ」

先輩たちはまず道のと真ん中に駐車した運転手をこっぴどく責めたのち、丘の上を指さすと運転手以外は緩やかな畦道を歩き出した。

「真ん中に停めたままじゃ不便じゃない？」

~~~~~

「のどかな村だよねえ」

坂道を登りながら、セルフィは綿毛を吹き飛ばすのを楽しんでいる。

「おお、そうだぜ！なんてたつて本島で一番大きな農村だからなあ。アルクラド平野の由来はこの村にあるんだぜ！」

「えっ？つてことは、平野いっっぱいがこの村つてこと？」

「ああ、そうだぜ！けっこうガーデンの生徒が多いんだよ、ここは」

「ふうん。そういえばゼルって港の出身だったんだもんね」

ゼルは話が咲いたことが嬉しかった。何より”常に冷めきった誰か”と比べて、地元について興味を抱いてくれた転校生によって少し緊張が和らいだ。

「おーい！はんちよ、早くう！」

冷めた男はノロノロとガーデン車を端に寄せていた。端、と言っても元から道幅のない田舎道に端などあったものか。それは誰にでも分かることであり、彼はあからさまな態度でそれを示している。

「- いったい、どこに停めればさっきより便利になるというんだ？」

再び道のと真ん中に停車した彼に丘から手を振るセルフイ。やはり彼女はスコールとゼルという”既存の不釣り合い関係”を中和するムードメーカーのようである。それを考えれば、この任務のメンバーにも希望が見えてきた気がする。シュウはキステイスの生徒達に一抹の手応えを感じていた。

丘から見下ろした茶色と緑のコントラストはとても美しい。菜の花やネギ坊主のように春を感じさせるものが揺れているのは、何とも言えない風情がある。しかしそんな中でかなり浮いた存在が、彼らの前にある近代的な建物だ。

「こだいせいぶつけんきゅうじょ？」

「そうよ、さあ入りましょう」



結局は元の位置に駐車してきたスコールが追いつくのを待って、彼らはドーム状の大きな建物に入って行った。

「おおっ！ すごいなあ！」

「なんか臭いねえ」

古代生物研究所には、その名の通り古代生物に関しての化石や標本が陳列されていた。体長11mもあるつかという獣脚類の化石は圧倒的である。バラム島には比較的古代から存在されたとされるモンスターが生息しており、ここはいわゆるホットスポットである。近辺の森は未だに最強の肉食モンスターであるアルケオダイノスが闊歩しており、その生態に関して盛んな研究がおこなわれていた。

「つてゼル、ここは見学で来たことあるでしょう？」

ああそうだったぜ！と頭をかくゼルに、キステイスは呆れた。

- まったく、彼は何のために本を読むのかしら？ あら、スコールが何か言いたそうね。

「何か言いたいことあるでしょ、スコール？」

そのアルケオダイノスの骨格標本の前でキステイスは訊ねた。スコールは面倒くさそうな籠った声で唸った。

「で、俺達をここに連れてきた意図はなんなんだ？」

キステイスの先日の痛心の心情を察してか、代わりにシユウが彼らに対応した。

「ああ、ね。任務のことは知っているわ。キミが言いたいのは、なんで丘に登ったのかってことでしょ？」

「そんなところだ」

「それにはまず私たちの任務を説明する必要があるわね」

- 私達の任務？

その疑問を感じたのはスコールに限らず、他の二人も同じだった。古代生物研究所とエリートSeed、なにか興味をそそるものがある。”ふんの化石”に食い入っていたセルフイも顔を上げた。

「スコール、就任式の夜に訓練施設にいたモンスター覚えてる？スコールがああという隙もなくキステイスは続けた。

「そのグラナルドについて調査をしに来ていたのよ。訓練施設に入り込むことなんて滅多にないから、何かあるんじゃないかって」

「おい、グラナルドってまだいたのかよ！？」

その話にはゼルが食いついた。ワイパーを強にした時のように、彼はスコールの視界で情熱を振りまいた。

これはスコールフィルターによって全て取り除かれた一部始終である。

「古代生物グラナルド！今では幻のモンスターと呼ばれているんだなあ……」

「……それと遭遇したなんて……どうだったんだ？教えてくれよスコール……」

（痛い目にあっただぞ、特にキステイス先生は……）

「……確か羽音は小型ジェット並みに大きくて……」

（いや、おまえの方が確実にうるさい）

「こら、ゼル！話を聞きなさい！」

シウウの制止もなんのその、既に鼻息の荒くなったゼルには糠の釘男のロマンを刺激された彼には、学食パンを奢るからというありきたりなその場凌ぎも意味をなさなかった。

「……確か羽根の音だけで視力の弱い動物は聴覚を混乱させら

れるんだぜ！」

（おまえの・・・唾が・・・俺をさらに混乱させる）

「・・・手足は退化して、獲物を食べる時にしか使われないんだぜ！・・・」

（まだ続くのか・・・？出来ればその目障りなおまえの手足も退化すればいいのだが）

（いや、そうなると口だけが発達する。それもご免だ・・・）

「・・・んでよお、幼生の時はラルドってんだよな！・・・」

「羽根が無い代わりによお、ダイヤみたいな硬い甲羅・・・」

（おまえは羽根を伸ばし過ぎだ。ああ、硬いシエルターがあれば入りたい・・・）

「・・・転がってよ！岩をも削り・・・」

（そして静かな場所へ潜る・・・）

「なるほどなるほど！」

地べたに腰を下ろして一部始終を聞き入っていたセルフィの拍手によつて彼の雄弁は幕を閉じた。ゼルは肩で息をし、スコールは額を押さえ、キステイスは天を仰ぎ、シュウは押され気味である。しかしそれでも疲れの色ひとつ見せずに平然としていたのはセルフィである。

「で、もういいかしら。時間もないし大事なことだけを話すわ。学園長から指示があつたのよ。ここで旅立ちのサポートをしるとね」キステイスは深いため息をつく、3人を待っていた目的を話しはじめた。サポートなどご免だとばかりの顔をしているスコールは馴

れたものよと、彼女は先を進める。

「どうやらなんやら、サポートと言っても任務における注意点の再確認のみであった。私服で向かう意味を考えると、お金のシステムについてだとか、組織に従順にしろだとか……」

・舐められたもんだ

スコールはずっと斜め下を見つめて聞き流した。彼にとって気休めのために任務前に励まされることは、単なる子守唄のようなものである。全く持つて必要がないのだ。

・結局は、ここまで来なくても掘立小屋の前で済んだ話じゃないか。

・そもそも、そんな基本的なこと百も承知だ。

「百も承知の人が裸の武器を列車内に持ち込むの？」

長年スコールを見てきたキステイスにとって、スコールの考えていることはお見通しだった。彼女もスコール含め3人が途方に暮れる事など心配はしていない。しかし、あくまでも心構えをここで説くのは隠れた目的のカムフラージュでしかないのだ。学園長を始めシユウ・キステイスも彼らの行動は心配していないが、戦力とチームワークが穴だと考えていた。

「さすがに、あんな物騒な物をぶら下げて歩いていたら、子供でさえ怪しむわ」

「ましてや、今から行くのは……」（分かっている、ティンバーだ。）

再び教師調で淡々と喋りつくすキステイスを上回る強い口調でスコールは制止した。

「分かった！ガンブレードのケースを忘れたことは気付かなかった

た。感謝する」

彼が声を荒らげたことにゼル、セルフイ、そして籠の中に飼われていたリスも飛び上がった。唾も飲み込めないほどに緊張感が張り詰めている。

スコールは、自分が作りだした空気にも関わらず周囲が黙っているのは嫌いだった。彼はこの空気を打開するすべはないとため息をつくと、出口へと向かった。

- 分かった。ケースを取りに戻ればいいんだろ・・・

「ちよつとスコール！どこに行くの！？」

シュウが大胆で遠ざかる彼を引きとめた。

「あるわよ、ケースならここに・・・」

不思議そうな顔をするスコールに、キステイスとシュウは微笑むのだった。

~~~~~

- 心外だ・・・。

- 酷い、ひどすぎる・・・

スコールはいつものように額を押さえ、さらには両手で顔を覆った。

「わぁー、スコールも落ち込むんだねえ」

「意外とコイツも単純だからよお」

- つるさい・・・。

先輩達が用意したガンブレードケースは歪いびつだった。2つほど不自然に山があり、取っ手が両開きのケースの番の役割を果たしている。

「これじゃあまるで・・・」

「そうよ、ギターケースよ」

キステイスがまたもやスコールの口を務める。秋の稲穂のようにしなりと肩を落とす彼を見て、一同は苦笑した。

あらゆる事象に関心を持たないスコールにとって、ガンブレードは唯一と言えるほどにこだわりを持っていた。ただでさえ自分の心理的なプライベートゾーンに干渉されることに嫌悪感を抱く彼は、愛着のあるガンブレードの惨めな扱いに非常に心を締めつけられる思いに違いない。何故ならティンバー行きの列車には夕方発という制約があり、ガーデンへケースを取りに行つては間に合わないことを一番よく理解しているからである。加えて、仮にケースを持ってきたとしても持ち運びには適していないのだ。それはあまりにも大きいため、どちらにしろ人目を引く結果となっていた。故に彼はギターケースを用いるしかなかったのだ。しかもそれを学園長及びキステイス達に見透かされていたのだから、そのショックはとても大きいに違いない。

「これじゃあギターケースというよりチェロケースだ・・・」

大きなギター型のそれに丁寧に肩かけ用のベルトまでくつつけてあることにスコールは呆れの域に達しながらも、なくてはならないことは自分が一番良く理解していたために渋々受け取った。そして思ふのである、「絶対に、できるだけこれに格納しないように努めよう・・・。」と。

「どう、気に入ってくれた？チェロ弾きさん」

そう微笑むキステイスとは目を合わせないようにしながらスコール

はケースを立て掛けると、なにやら中からゴトンという鈍器が落ちる音がした。ゼルもセルフイもその音には気がついたようだが、その音が無かったかのようにシユウは声を張り上げた。

「あともうひとつ、あなた達3人には大事なことをやってもらわなくちゃね」

任務のための任務（後書き）

話が進まなくてすみません（^| ^ ;）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3983y/>

SUCCESSION of WITCHES LOVE ? ~ 迷えしフクロウ ~

2011年11月20日11時31分発行